

研究ノート (Study Notes)

学童期における認知発達の特徴

～ 9, 10歳の発達の節目に焦点を当てて～

竹内 謙 彰

(立命館大学産業社会学部)

Cognitive Development in School Age Children:
Focusing on the Turning Point of Development around the Ages of 9 and 10 Years

TAKEUCHI Yoshiaki

(College of Social Sciences, Ritsumeikan University)

The aim of this study is to clarify the features of cognitive development in school age children in the light of developmental turning point. The notion of *the turning point of development around the ages of 9 and 10 years* was examined in terms of the recent researches on autism and intelligent testing as well as Tanaka's and Vygotsky's developmental theories. It was suggested that the core features of the ages are the acquisition of planning ability, conscious awareness and voluntary control. For autistic children, the importance of the acquisition of theory-of-mind was indicated. In conclusion, one of the challenges in the cognitive development research is to find and describe the relationship between the turning point and antecedent factors, especially in children with autism. Self-awareness related to cognitive development in school age children was also discussed.

Key Words : school age children, cognitive development, turning point of development, autism

キーワード : 学童児, 認知発達, 発達の節目, 自閉症

1. はじめに

9, 10歳頃に発達上の節目ないしは転機があるとする考え方は, そもそも聴覚障害児教育の分野で指摘されたものであった。かつて聾教育においては, 特に国語教育などの分野で9歳以上のレベルの学習内容の獲得に困難を伴う子どもが多いことが指摘されており, そうした困難性に対して「九歳の壁」という名称が用いられることとなったようである。後には, 一般的な

発達の節目としての重要性が指摘されるようになり, 1980年代には, 発達や教育の分野で「9, 10歳の発達の節目」に関する議論がある程度活発になされ, またこれを主要なテーマとした著作もいくつか出版された (e.g., 加藤, 1987; 秋葉, 1989)。

すでに20年前に一定の議論がなされたテーマを現時点で再度取り上げるのは, 近年, 特に自閉症スペクトラム児において, 9, 10歳頃が, 発達上の重要な転換点になっているとの指摘 (e.g., 別府・野村, 2005; Happé, 1995; 杉山,

2000；2005) を一つの契機としている。また、筆者の個人的経験になるが、昨年度より高機能自閉症やアスペルガー障害の子どもたちの療育活動に関わる中で、そうした子どもたちの学齢期後半における発達課題は何かという問題に直面したことが、その問題に関連する近年の諸研究に目を向けさせる動機づけとなったことも付け加えておきたい。

もう一つの契機は、ヴィゴツキー理論の核心に位置づく二つの概念(「発達の最近接領域(最近接発達の領域¹⁾)と「内言」)をめぐる中村(2004)の著作に刺激を受けたことである。特に、自覚性と随意性の獲得こそが、科学的概念の獲得の発達の意義であるとする指摘は、学童期の発達課題を考える上で、非常に重要であると思われたのである。

この二つの契機から、学童期から思春期にかけての時期にある、発達上の重要な転換点の問題を、改めて認知発達上の重要な研究課題として考え、整理を試みるというのが、本稿の課題である。整理にあたっては、自閉症の発達に関する知見、知能の心理測定的研究の知見、および発達理論(ヴィゴツキー理論と田中による階層-段階理論)、という3つの側面から検討を進めることとしたい。

2. 自閉症と9, 10歳頃の節目

本節では、まず、自閉症と「心の理論」とがどのように関連しているかという問題を切り込み口として、9, 10歳頃の発達の節目の問題を考え始めたい。

そもそも「心の理論」研究は、Premack and Woodruff (1978) によって問題提起がなされ、

「心の理論」を測定する誤信念課題が考案されて以降、多くの実証的研究を生み出してきた(Wimmer and Perner (1983) による「マクシ課題」や、その変形である「サリーとアン課題」(Baron-Cohen, Leslie, and Frith, 1985), あるいは「スマーティ課題」(Hogrefe, Wimmer, and Perner, 1986) などがよく用いられている; e.g., Mitchell, 1997)。そうした諸研究から、誤信念課題に代表される「心の理論」を測定する課題に通過できるようになるのは、課題の難易度などの要因によって多少の変動はあるものの、定型発達児では3歳から5歳頃であることが、明らかにされてきた(e.g., Wellman, Cross, and Watson, 2001; Callaghan, Rochat, Lillard, Claux, Odden, Itakura, Tapanya, and Singh, 2005; なお、簡単なまとめとして竹内(2007)参照)。

それに対して自閉症児では、知能検査等で測定される知的能力では、あまり遅れを示さない者でも、「心の理論」獲得には困難を示すことが知られている。通常の発達においては、4歳前後の時期にその基本的な機能が獲得される「心の理論」であるが、自閉症者では、言語性知能で見た精神年齢で平均9歳2カ月にならないければ「心の理論」を測定する課題である誤信念課題に正解できるようにならないことを、Happé (1995) は示した。

では、自閉症者が言語的知能の精神年齢において9, 10歳を超えると獲得できる「心の理論」は健常者と同質のものであろうか。この点に関し、別府・野村(2005)は、誤信念課題と言語的理由づけを健常児と自閉症児の両者に対して実施した結果から、健常児では、直感的に「心の理論」が形成される時期があり、のちに言語的理由づけが可能になるのに対し、自閉症者は、直感的な「心の理論」を欠いたまま言語的理由づけによる「心の理論」が形成されるということを示唆した。ちなみに、別府・野村(2005)は、

1) 中村(2004)は、通例では「発達の最近接領域」と訳されるところを、「最近接発達の領域」と訳しているが、本論文中では、混乱を避けるため、以下では通例に従った名称を用いることとした。

直感的な「心の理論」を、他者との間での身体感覚を伴う感情経験の記憶に基づくものではないかと考察している。つまり、誤信念課題に対して定型発達の幼児は、「登場人物はXが移動されたところを見ていないから元の場所にあると考えているはずだ」と表現されるような言語論理的推論を発動することができなくとも、類似の状況によって喚起された身体感覚を伴う記憶から瞬時に適切な判断を下すと考えられるのである。それに対して、高機能自閉症者は、言語性の精神年齢で9、10歳に相当する言語論理的な判断能力が獲得されて初めて誤信念課題に正答しうようになると解釈される。

比較的知的能力の高い自閉症者は、10歳代に、ある種の転機を迎えることが多いことは、症例報告や自閉症者の自伝、あるいはいくつかの追跡調査などから示唆されてきた（eg. 追跡研究としては、Kanner and Eisenberg, 1956; Kobayashi, Murata, and Yoshinaga, 1992など、また、自伝では、Shore, 2003など²⁾）。おそらくそうした変化には、直感的レベルの能力に欠けるとしても、言語論理的には他者の心的状態を推測できるようになることが、寄与しているであろうと推測される（ただしそれだけではなく、感覚の異常などもある程度軽快するなど年齢に伴う諸変化もまた関与しているだろう）。

10歳頃以降、具体的にはどのような変化が生じるのだろうか。自閉症児に対する多くの臨床経験を持つ杉山（2005）によれば、高機能自閉症児は、小学校高学年になると「心の理論」を獲得するようになるので、社会的なルールの理

解が進み、周囲の人々とのトラブルが激減する一方、一部の子どもたちでは、ささいな働きかけを過度に被害的に受け止めるようになりパニックを起こしたり、過去の不快場面がフラッシュバックして大騒ぎを引き起こすことがあるとのことである。

このような指摘から、自閉症児における「心の理論」の獲得が、社会的適応の面で、肯定的な効果と否定的な効果の両面を持っていることが伺える。肯定的な面は、他者の意図を推測できるようになることや社会的なルールを理解できるようになることで、周囲との無用のトラブルが減少することである。それに対して否定的な面は、他者理解が、直感的な基礎を持たないゆえに不完全であり、他者からの働きかけを読み誤り、かえって周囲とのトラブルが増大する可能性である。周囲の人間がどのような関係を築こうとしているかによって、肯定否定のどちらの面がより前面に出てくるかが変わってくるだろう。

治療教育という面からは、この時期の自閉症者に獲得される「心の理論」の能力をどのように捉えるかが、重要なポイントとなるだろう。

一つのアプローチは、欠けた面を補うという方向性である。つまり、直感的な基礎が不十分なのであるから、他者との情緒的なつながりを強め、他者への関心を高める活動を促すという方向である。この点に関し別府（2007）は、情動共有を含めた相互主観的経験を教育的に保障することの重要性を強調している。

具体的には、遊びの指導などの働きかけが有効であろう（eg., Beyer and Gammeltoft, 1998）。大人との間で、あるいは子ども同士で遊びを組織化することによって、他者との間に喜びの情動を共有する経験を持つことや、他者の心的状態への気づきが促されることが期待される。また、対人関係発達指導法（RDI: Relationship Development Intervention;

2) ただし、自閉症者の自伝でもテンプル・グランディンのように、10代前半の中学生時代、「私の生活はもっとも惨めだった」と述べ、10歳代が人との関係の改善が進むよりもむしろ孤独感にさいなまれた時期であったことを示唆するものもある（Grandin and Scariano, 1986）。周囲の理解や配慮によって、この時期が実り豊かになるか耐え難いものになるかが分かれると言えるかもしれない。

Gutstein, 2000) のように、対人関係を共同注意や情動共有といった基礎的なところから形成していくことを位置づけた指導法なども、この面での働きかけに重なる部分が多いように思われる。

もう一つは、新たに獲得された能力を梃子として、対人関係を広げて行く方向性である。言語論理的な他者理解の能力を基礎としながら、言葉による人とのつながりを強め深めていくことが課題になる。たとえば、高機能自閉症者であるスティーブン・ショア氏は、その自伝の中でカウンセリングの効用について、自分の内面を整理して人に理解してもらうように語ることが、他の人とのコミュニケーションにおけるトラブルを減じることに寄与したことを指摘している (Shore, 2003, 邦訳 p.109)。言語論理的な能力があっても、それを他者に理解できるように整理することは、自閉症者にとっては困難があるが、カウンセリングにおける受容的な状況設定は、余裕を持って表現を吟味する機会を与えていたと言えるのではないだろうか。

さて、ここまでの議論において、特に丁寧な吟味をすることなく、言語論理的な他者理解の能力という言葉を用いてきたが、それは、どのような能力として捉えられるものなのだろうか。また、9、10歳頃に獲得される他の認知的諸能力とはどのような関係にあるのだろうか。以下では、知能の心理測定的研究との関連、および発達理論との関連から、こうした問題について検討を行いたい。

3. 知能の心理測定的研究と9、10歳

生沢 (1976) はビネー式知能検査及び京都児童院式発達検査 (K式発達検査の旧版に相当) の結果を対象として潜在クラス分析という多変量解析の統計技法を用いた分析を行い、おおよそ10、11歳頃に一つの発達上の質的転換点があ

ることを示唆する結果を得た。この質的転換点を区切る指標としては、「实际的個別的知能測定法」(いわゆる「鈴木ビネー知能検査」) に含まれる、「球さがし」や「混乱文の整理」、「不合理の発見」など8つの課題が指摘されている。

生沢 (1976) は、「これらの問題には、課題として与えられた材料に内在する矛盾や混乱を整理整頓して正解に達する作業が多い (p.166)」と述べている。言い換えれば、こうした課題の解決に必要なのは新たな秩序や枠組みを創造する知的機能である。年齢的には、9、10歳よりはやや後の時期にはなるが、知的能力の質的な変化が、新たに秩序や枠組みを作る能力として現れてくると言ってよいだろう。

ちなみに、加藤 (1987) は、9、10歳頃に発揮されるようになる能力を、計画性の能力と捉え、そうした能力が、子どもたちの遊びや手伝いなどの日常生活の中での活動に活かされていくことの重要性を指摘している。

計画性の機能は、多くの知能検査課題の解決に際して多少なりとも関与しているものの、計画性の能力それ自体は、知能検査においては必ずしも直接的に測定されるものではなかった。しかし近年、計画性それ自体を測定の対象とする課題を含んだ検査であるDN-CAS (Das-Naglieri Cognitive Assessment System) が日本でも標準化された (ただし、「計画性」という用語ではなく、「プランニング」という用語が用いられている)。そこで次に、DN-CASを取り上げ、その検査で測定されるプランニングとはどのようなものかについて、9、10歳頃の発達の節目と関連づけつつ一定の検討を加えたい。

DN-CASが依拠するのは、旧ソ連の心理学者であったLuria (e.g., Luria, 1973) の考え方を心理測定の領域に応用したカナダのDasらが提唱したPASS理論である (e.g., Das, Kirby, and Jarman, 1979; Das, Naglieri, and Kirby,

1994)。この理論では、人間の認知機能は、プランニング (Planning)、注意 (Attention)、同時処理 (Simultaneous processing)、継次処理 (Successive processing) の4つの重要な活動に基づいており、これらが個人の知識基盤を変化させるという考えを提案している。

Naglieri and Das (1997) によると、プランニングとは、「個人が問題解決の方法を決定し、選択し、適用し、評価する心的過程 (mental process) である (邦訳 p.2)」。DN-CASにおいてプランニングを測定するために開発された下位検査は、「数の対探し」、「文字の変換」および「系列つなぎ」の3つである。これらの下位検査は、以下の諸点を子どもに求めるものである。

- ・活動のプランを作ること
- ・プランを適用すること
- ・当初の目標に沿った活動かどうか検証すること
- ・必要に応じてプランを修正すること

言い換えれば、課題で求められることは、単にプランを立てるだけではなく、その有効性をモニターし、課題の要求に応じて、前に立てたプランを見直したり、別のプランを作り出したりすることまでが含まれるのである。

こうしたプランニングの能力は、幼児期の終わり頃から獲得され始めるものであると考えられる (e.g., 近藤, 1989; 竹内, 1986; Takeuchi, 1987)。実際、日本版DN-CASの適用年齢の下限は5歳0ヶ月である。

DN-CAS日本版の『理論と解釈のためのハンドブック』では、各下位検査の素点の年齢変化についての記載があるが、本稿の主題である9, 10歳頃に、プランニングの下位検査で大きな発達の変化があることを示すデータは見られない。9歳以降で、能力の伸張を示す比較的大きな素点の変化が見られるが、それは、特にプランニングの下位検査に限らず、注意や同時処

理、継次処理でも見られるものである (同書 p.40-41参照)。

それに対して、プランニングの下位検査に関わる方略使用の年齢的变化については、興味深いものがある。自己報告による方略使用では、9, 10歳頃に目立った変化は見られないが、観察による方略使用は、9歳ないし10歳で減少する傾向が見られるのである。観察によって認められる方略とは、課題遂行時に「指を置いた」とか「声に出して唱えた」といった、外的に表現される方略である。これはあくまで推測に過ぎないが、外から観察可能な発語を含む身体動作的な方略が鳴りをひそめ内面化 (心内化) する傾向を強めるのが9, 10歳頃なのかもしれない。

ちなみに、同書ではプランニングを伸ばすための指導に関する研究が紹介されているが、その要点として、問題解決のために用いた方略や方略使用の改善方法について意識化・言語化することが強調されている (同書 p.83-86参照)。これらのことから、自らの問題解決過程を意識化できるようになるという点に、9, 10歳頃の認知発達の焦点の一つがあるのではないかと考えられる。

4. 発達理論と9, 10歳

ここでは、田中とヴィゴツキーのそれぞれの発達理論を手がかりにして、9, 10歳の発達の節目の問題を考えたい。

まず、9, 10歳に発達の質的転換期を位置付けている可逆操作の高次化における階層-段階理論 (e.g., 田中, 1980; 1987) を取り上げてみよう。階層-段階理論によれば、9, 10歳という年齢時期は、次元可逆操作の階層から変換可逆操作の階層への飛躍的移行の時期とされる。その際、「発達の各連関において、変換移行次元可逆対操作をみることができ。すなわ

ち、下部連関においては可逆対運動や可逆対表現が、基本連関においては可逆対保存が、上部連関においては可逆対算法が、さらに散逸連関に可逆対評価がある。そしてそれらを統合する集団的自己が発生するとみられる（田中, 1987, p.140）」とまとめられている。

この時期の階層間の移行にいたる生後第3の新しい発達の原動力の発生は、通常5歳半頃の3次元形成期にみられると考えられている。「書きことばに例示される新しい交流の手段を伴った生後第3の新しい発達の原動力が、次元対称性における外への発達の破れとして対発生していく。それはまた、発達の基礎となった3次元の形成を拡げていく（田中, 1987, p.139）」。

わかりやすく言い換えれば、9、10歳頃に見られる発達の質的転換をもたらす原動力は、通常5歳半ば頃に位置する3次元形成期に、生理的基礎と社会的諸関係において発生すると考えられている。

この理論では、具体的・視覚的なイメージを持たない関係理解の様式である「反省的思考」が通常発達では5歳半頃（3次元形成期）から始まるとされるが、前述したように、この時期はまた、次の変換可逆操作を乗り越える発達の原動力が発生する時期と位置づけられている。そこでは、「書き言葉を中心とした新しい交流の手段」が「準備」され始め、つぎの階層の移行期である9、10歳頃に獲得されると考えられている。

他者との関係並びに人格発達の領域でみると、5歳半ば以降、「相互性の方法」を用いて個人間の等価性を成立させることが可能になり、それが9、10歳頃には、個人相互の関係における相互性操作が成立し、「相互性の方法」が「関係の相互性」へと変換され、「相互性の原理」が個人相互の関係における実践の原理として認識されるようになる。こうした過程を経て、「集団的自己」が誕生すると捉えられている。

9、10歳頃の発達の質的転換期に関する階層-段階理論による説明は、この時期の発達理解にとって多くの示唆を含んでいることは確かである。しかし、階層-段階理論と学童期以降の自閉症の発達とを関連づけた検討には、まだあまり手がつけられていないように思われる。例えば前述した自閉症者の発達、特に高機能自閉症者の発達を考える場合には、9、10歳頃の節目の問題と関わって、検討すべき多くの課題が含まれているだろう。具体的には、例えば、5年生頃に学年相応の学業成績をおさめ、「心の理論」を曲がりなりにも獲得できた高機能自閉症者は、変換可逆操作の階層に移行することができたと捉えられるのであろうか。そうした高機能自閉症者（あるいはアスペルガー障害者）であっても、様々な認知的問題解決の困難を抱えていることが多く、対人関係での困難やトラブルにも遭遇しやすい。

今日における自閉症の発達研究では、自閉症児の発達過程は定型発達児とは異質なものであると捉える見方が主流である。自閉症の臨床像を浮かび上がらせる点では、異質性を強調した発達観は有効だと言ってよい。他方、感情体験という点では、自閉症児と定型発達児の間に質的な違いはないという指摘もある（e.g., 杉山, 2000）。個人差をとともなう心理的メカニズムを発達の過程にどのように位置づけるかは、難しい問題ではあるが、今日、学童期から思春期にかけての発達上の問題が様々に指摘されている中で、理論的な課題としても検討に値するものと言えるだろう。

さて次に、ヴィゴツキーの発達理論との関わりから、9、10歳頃の発達の節目の問題について検討を加えたい。ヴィゴツキーの場合、発達における年齢区分では、9、10歳頃は、大きな転換点とは位置づけられていない。発達の節目となる年齢、彼の言葉で言えば危機的年齢は、新生児、1歳、3歳、7歳、13歳、17歳であり、

9, 10歳はどちらかと言えば安定した時期に位置づけられているようである（ヴィゴツキー, 1984）。

むしろここで取り上げたいのは、こうした年齢区分ではなく、発達における新形成物とヴィゴツキーが呼ぶところの問題である。中村（2004）によれば、発達の最近接領域（ヴィゴツキー, 1935）の考え方は、発達に対する一般的な教育の主導性を表現したものというよりは、むしろ、学校教育における科学的概念の発達に対する科学的知識の教授の主導性という点に、主眼があるものとされる。そして、教育によって先導された科学的概念の発達は、学習内容の獲得それ自体に価値があると同時に、学齢期に二つの新形成物をもたらすという点に大きな意義があると考えられるのである。その新形成物とは、意識における自覚性と随意性であり、この二つのモメントは、学齢期に形成されるすべての高次心理機能の基本的特徴であると言ってよいものである。

言い換えれば、科学的概念の発達によって、子どもは概念自身の自覚と自由な支配（随意的な使用）が可能となるが、さらにそのことは、子ども自身の心理過程そのものの自覚と自由な支配を可能にするものなのである。

さてここで、自覚性・随意性の獲得を自閉症児の発達との関連から若干考察しておきたい。おそらく、自閉症児が「心の理論」を獲得する場合、自覚性が関与していると考えて差し支えないだろう。自らの心内操作を自覚化できる能力は、他者の心的内容を推測することにも適用できるはずである。ヴィゴツキー自身は、自覚性や随意性が本格的に働くのは思春期以降と捉えていたようであるが、それらの新形成物は、科学的概念の獲得と並行して徐々に生成していくものでもあったと考えられることから、そうした機能が働き始める時期を、おおよそ9, 10歳頃と想定してかまわないのではないだろうか。

そう考えれば、Happéの示唆した、自閉症児が「心の理論」を獲得する言語知能の精神年齢が平均して9歳2ヶ月であるというデータとも符合するように思われる。

ヴィゴツキーの内言概念に関する中村（2004）の指摘もまた、学齢期・思春期の発達を考える上で、示唆に富むものだと言えるだろう。内言は、豊かな意味の世界を子どもの内面に作り上げる。内言は、単に外的な言語を内面化したものではなく、自分にとって分かっていることは省略され、本質的な部分だけが残る。他方、内言は意味を保持しており、その存在形態は、イメージ的なものと考えられている。内言が発達するにつれて、豊かな内的世界を形成する可能性は増大する。思春期以降の内的世界の充実、こうした内言によるところが大きいと言えるだろう。

自閉症児は、思春期の入り口前後にファンタジーへの没頭が生じやすいと言われているが（杉山, 2000）、そのこと自体は精神世界の発達の現れともいえるものであろう。しかし、そのような内的世界のある意味での豊かさは、外に表現される回路を持つことで、対人関係の中で位置づけが得られ、さらに豊かな意味の世界を織りなすことに向かうのではないか。そう考えると、話し言葉においても書き言葉においても、内的な意味の世界を表現する機会を持つこと、また、そのことで他者とコミュニケーションを深めることが出来ることが重要であろう。このことは、自閉症の療育に関わる課題であると同時に、学童期の教育一般にとっても重要な課題なのではないだろうか。

5. まとめ

この小論では、自閉症児の発達の特徴、知能の心理測定的研究、そして発達理論の3つの切り口から、学童期における認知発達に関わる諸

問題を、特に9、10歳頃の発達の節目に焦点を当てて論じた。ここでは、どのような研究課題があるかを述べることで、まとめとしたい。

まず一つは、9、10歳頃の発達の質的転換とそれ以前の発達との関連である。可逆操作の高次化における階層-段階理論では、5歳半ば頃に9、10歳頃の節目を乗り越える発達の原動力が生成することが明解に述べられているが、知能の心理測定的研究においても幼児期終わり頃に計画性（プランニング）の基礎が形成され始めると見ることができるであろうし、学校教育の開始や書き言葉の習得の開始なども、視野に入れるべきであろう。どのような先行諸条件、諸要因が、9、10歳頃の節目を乗り越える力をもたらすのかは、重要な研究課題であるだけでなく、その解明は実践的にも重要な示唆を与えるものとなるだろう。また、9、10歳の質的転換を乗り越えた認知発達の実相を理論的に整理することも課題として付け加えておくべきであろう。それには、ヴィゴツキーの指摘する自覚性と随意性の獲得が手がかりとなるように思われる。

もう一つの課題は、特定の発達障害との関連での、9、10歳頃の発達の節目の問題の解明である。とりわけ、自閉症児におけるこの時期の発達の質的転換をもたらす諸条件の解明は、重要な研究課題と言ってよい。その際、自閉症独自の発達プロセスを踏まえることの重要性和、発達の普遍的なプロセスの中での自閉症の発達の位置づけという、二つの面からの把握が重要であるように思われる。独自性という点では、例えば、すでに多くの研究者や実践家が指摘しているように、自閉症は「心の理論」が欠如した障害と捉えるべきではなく、他者の心を理解することに、通常とはいささか異なる筋道からアプローチするようになるのだと考えるべきであろう。発達における機能連関のシーケンスには、自閉症の独自性が表れていると捉えられ

よう。他方、身近な人と愛着を形成することによって心理的に安定したり、他者とコミュニケーションを持ちたいという欲求を持つなどの、他者との関係性の中での感情のメカニズムの基本は、定型発達児と変わらない。通常であれば乳幼児期に獲得されるべき共同注意や情動の共有に困難を残しつつも、人間らしく生きていくために保障すべき諸課題には、普遍性があるように思われるのである。

最後になるが、認知発達と人格発達の関連で9、10歳頃の発達の節目の問題を解明することも、重要な課題であるように思われる。内面の充実ということを論じる上では、ヴィゴツキーの内言論には学ぶべきものが多く残されているように思われる。

また、今回あまり触れることはできなかったが、発達障害児への支援のあり方として、子どもの自己を育てるという方向が模索され、実践がなされてきている（e.g., 田中・都筑・別府・小島, 2007）。9、10歳頃は、まさに自己が自覚され、意識的に対象化されるようになる時期であるだけに、認知発達への支援と関連づけながら、この問題を整理することも重要な研究課題かつ実践的課題となると言ってよいだろう。

謝 辞

本小論は、2007年10月に行われた全国障害者問題研究会京都支部主催の発達講座において報告した内容をもとに、あらたな内容を加えて再考し、まとめたものです。報告の機会を与えてくださった本学産業社会学部教授 荒木穂積先生に感謝するとともに、様々な質問や意見をいただいた同講座参加者の方々にも感謝いたします。

引用文献

- 秋葉英則 (1989) 「思春期へのステップ：9, 10歳を飛躍の節に」。清風堂書店。
- Baron-Cohen, S., Leslie, A., & Frith, U. (1985). Does the autistic child have a “theory of mind”? *Cognition*, 21, 37-46.
- Beyer, J., & Gammeltoft, L. (1998) *Autism and play*. Jessica Kingsley Publishers. 井上洋平・荒木穂積 (訳). (2008) 自閉症と遊び。クリエイツかもがわ。
- 別府哲・野村香代 (2005) 高機能自閉症児は健常児とは異なる「心の理論」をもつのか：「誤った信念」課題とその言語的理付けにおける健常児との比較。発達心理学研究, 16 (3), 257-264.
- Callaghan, T., Rochat, P., Lillard, A., Claux, M. L., Odden, H., Itakura, S., Tapanya, S., & Singh, S. (2005) Synchrony in the onset of mental-state reasoning: Evidence from five cultures. *Psychological Science*, 16, 378-384.
- Das, J. P., Kirby, J. R., & Jarman, R. F. (1979) Simultaneous and successive synthesis: An alternative model for cognitive abilities. *Psychological Bulletin*, 82, 87-103.
- Das, J. P., Naglieri, J. A., & Kirby, J.R. (1994) *Assessment of cognitive process: The PASS theory of intelligence*. Boston: Allyn & Bacon.
- Grandin, T., & Scariano, M. M. (1986) *Emergence: Labeled autistic*. Arena Press. カニングハム久子 (訳) (1994) 我、自閉症に生まれて。学習研究社。
- Gutstein, S. E. (2000) *AUTISM/ASPERGERS: Solving the relationship puzzle*. Future Horizons. 杉山登志郎・小野次朗 (監修). 足立佳美 (監訳). 坂本輝世 (訳) (2006) 自閉症/アスペルガー症候群 RDI「対人関係発達指導法」—対人関係のパズルを解く発達支援プログラム。クリエイツかもがわ。
- Happé, F. (1995) The role of age and verbal ability in the theory of mind task performance of subjects with autism. *Child Development*, 66, 843-855.
- Hogrefe, G. J., Wimmer, H., & Perner, J. (1986). Ignorance versus false belief: A developmental lag in attribution of epistemic states. *Child Development*, 57, 567-582.
- 生沢雅夫 (1976) 「知能発達の基本構造」。風間書房。
- Kanner, L., & Eisenberg, L. (1956) Early infantile autism 1943-1955. *American Journal of Orthopsychiatry*, 26, 55-65.
- 加藤直樹 (1987) 「少年期の壁を超える」。新日本出版社。
- Kobayashi, R., Murata, T., & Yashinaga, K. (1992) A follow-up study of 201 children with autism in Kyushu and Yamaguchi, Japan. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 22, 395-411.
- 近藤文里 (1989) 「プランする子ども」。青木書店。
- Luria, A. R. (1973) *The working brain: An introduction to neuropsychology*. Penguin books.
- Mitchell, P. (1997) *Introduction to theory of mind: Children, autism and apes*. London: Edward Arnold. 菊野春雄・橋本祐子. (2000) 心の理論への招待。ミネルヴァ書房
- Naglieri, J. A., & Das, J. P. (1997) *Cognitive Assessment System administration and scoring manual*. Itasca, Illinois: The Riverside Publishing. 前川久男・中山健・岡崎慎治. (2007) 日本版DN-CAS認知評価システム 理論と解釈のためのハンドブック。日本文化科学社。
- 中村和夫 (2004) 「ヴィゴツキー心理学 完全読本」。新読書社。
- Piaget, J., & Inhelder, B. (1966) *La psychologie de l'enfant*. Paris: Presses Universitaires de France.
- 波多野完治・須賀哲夫・周郷博 (1969) 新しい児童心理学。白水社。
- Premack, D., & Woodruff, G. (1978). Does the chimpanzee have a theory of mind? *Behavioral and Brain Sciences*, 4, 515-526.
- Shore, S. (2003) *Beyond the wall: Personal experience with autism and Asperger syndrome. 2nd edition*. Autism Asperger Publishing Company. 森由美子 (訳) (2004) 壁の向こうへ—自閉症の私の人生—。学習研究社
- 杉山登志郎 (2000) 「発達障害の豊かな世界」。日本評論社。
- 杉山登志郎 (編) (2005) 「アスペルガー症候群と高機能自閉症：青年期の社会性のために」。学習研究社。
- 竹内謙彰 (1986) 幼児における継次情報の処理と保存の発達。教育心理学研究, 34, 280-284.
- Takeuchi, Y. (1987) The developmental change of successive information processing in preschool children: Planning or simultaneous synthesis? *Psychologia*, 30 (3), 152-159.
- 竹内謙彰 (2007) 発達の指標としての「心の理論」課題：実行機能の役割に焦点を当てて。愛知教育大学

- 研究報告 (教育科学編), 56, 87-94.
- 田中昌人 (1980) 「人間発達の科学」. 青木書店.
- 田中昌人 (1987) 「人間発達の理論」. 青木書店.
- 田中道治・都筑学・別府哲・小島道生 (編) (2007) 「発達障害のある子どもの自己を育てる: 内面世界の成長を支える教育・支援」. ナカニシヤ出版.
- ヴィゴツキー, L. S. (1984) 柴田義松・宮坂瑤子・土井捷三・神谷栄司 (訳) (2002) 新児童心理学講義. 新読書社.
- Wellman, H. W., Cross, D., & Watson, J. (2001) Meta-analysis of theory-of-mind development: The truth about false belief. *Child Development, 72*(3), 655-684.
- Wimmer, H., & Perner, J. (1983) Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding deception. *Cognition, 13*, 103-128.
- (2008. 8. 26 受稿) (2008. 10. 27 受理)